

幻島

霜月 透子

おーい、おーい、と風が鳴る。そんなときは決ままほろしじまって幻島が現れる。朝霧の向こうにぼんやり浮かぶ、行けそうで行けない幻の島。

「なんだケン坊、今朝は早起きだな」

海を見下ろす庭に立ち尽くしていたら、頭をガシガシと乱暴に撫でられた。

「くっせ。じいちゃん、魚を捕った手で触るなよ」

じいちゃんは悪びれた様子もなく、「朝飯を釣ってきたぞ」と得意げに釣り竿とバケツを掲げて見せた。

焼き魚の朝食をとっているうちに空が明るくなってきた。

「ケン坊、ごはんこぼしてるぞ。外ばかり見てどうした？」

じいちゃんは早くも食べ終わった食器を重ねながら、僕がこぼしたご飯粒を摘まんで自分の口に入れた。

「幻島はもう消えちゃったかなと思って」

「ああ、霧が晴れりゃ消えるな。あれは蜃気楼みたいなものだから」

「でも行った人がいるって聞いたよ。上陸したら帰れなくなるんだって。それって、実際にあるってことでしょ」

なんの規則性も前触れもなく朝霧の中に突如現れる島。そこにあるのはせいぜい数時間。幻島は現れたり消えたりする自然現象みたいなものだ。そのくせ、幻島に上陸した人がいるという噂も後を絶たない。ただ、ひとたび上陸するとどうやっても抜け出すことができず、島が消えるときに島内にいる人も一緒に消えてしまうというから、その話を持ち帰れる人もいないはずなのだ。

「そんなのは子供たちの噂だろ。幻島へは行きたくて行けるもんじゃない。島の者は誰一人船を持っていないしな。観光船に乗るしかないが、乗船券は簡単には手に入らない」

「泳いで行けばいい」

「ばかなことを言うな。泳げるわけがないだろう。海で泳いじゃいけない。いいな？」

「わかってるよ」

じいちゃんはいつまでも僕を小さな子供のように扱う。ちょっとむっとしている僕の機嫌を取るように、じいちゃんにはやりと笑った。

「そんなことよりな。今日は観光船が来ていたぞ」

「え。ほんと？」

「ああ。今朝、防波堤で釣りをしていたら、ちようど入港してきた」

「誰か降りた？」

「若い女の人がひとり降りてきたな」

「見てくる！」

「見てくるって、おい、学校は！」

声を張り上げるじいちゃんを振り切って、僕は港へと走った。この島はのどかで平和だけど、それだけじゃちょっと物足りない。観光船や外の人がやってくるのは大イベントなのだ。

弾むように石畳の坂道を下る。この島はひとつの山みたいになっていて、平地はほとんどない。民家は山の斜面にへばりつくように建ち、畑や田圃も棚田になっている。

僕は走りながら、畑仕事をしているおじさんに声をかけた。

「おじさん、おはよう」

「おはよう、ケン坊。学校はそっちじゃないだろ」

「学校どころじゃないよ。観光船が来たんだって！」

「そうか。海には気をつけろよ」

「うん！」

この島は特に観光地というわけではない。島民がのんびり穏やかに暮らしているだけだ。防波堤で釣りをしたり、畑で作物を育てたり。それだけの島なのに、しばしば観光客が訪れる。彼らはふらりとやってきてふらりとなくなる。中にはそのまま島に残る人もいる。さっきのおじさんもそう

だ。  
おじさんは都会出身だ。都会では文字通り一日の休みもなく働いていたという。畑仕事にも休みはないから似たようなものだと思うのだけど、ここでの暮らしは気に入っているらしい。

港まで下りると、栈橋に観光船が波に揺れていた。小さい船だから、外から見ただけで誰もいないのがわかった。

海沿いの道を砂浜がある方に進む。砂浜には無人の海の家が一年中立てられたままになっていて、観光客はみな、そこで勝手に宿泊していく。だから今回の人もそうなのだろうと見当をつけたら、あたりだった。

女の人が砂浜から一段高くなった海の家の上に腰掛けていた。白い薄地のワンピースが潮風になびいている。僕に気づいてにっこり微笑んだ。

「こんにちは。島の子？」

「こんにちは。うん。じいちゃんと暮らしてるんだ。お姉さんはどこから来たの？」

「あっちの方」

そう言っ、今朝、幻島が浮かんでいたあたりを指さした。

「え？ 幻島から来たの？」

ぼおと汽笛が鳴って、僕の声はかき消された。観光船の出港の合図だ。

お姉さんは勢いよく立ち上がった。

「あ、行かなきゃ」

「もう？ 来たばかりなの？」

「ここに来たら、帰りの乗船券が置いてあったの。だから乗らなきゃ」

証拠を示すように細長い紙を掴んでひらひらさせる。

「いいなあ」

思わずこぼれた僕の言葉に、お姉さんは申し訳なきそうに微笑んだ。

僕たちは港までの道を並んで歩いた。お姉さんからは海のおいがした。

棧橋で一度は「じゃあね」と手を振ったお姉さんだったが、数歩歩いてからふと立ち止まり、振り返った。

「ねえ、あなた。観光船に乗りたいの？」

ものすごく今更だけど、きつと砂浜で僕が「いいなあ」と言ったことへの返事なのだろう。

「うん。乗りたい」

「乗ってどうするの？」

「幻島に行きたい」

「行ったら、もうここへは戻れないらしいよ」

「じいちゃんは、それは噂だって言ってた」

「ふうん」

お姉さんは急に興味を失ったように背を向けた。僕は慌てて叫んだ。

「でも！ 帰ってこれなくても行きたいんだ！」

お姉さんは振り返って、僕の本心を確かめるみたいにじっと見つめた。

ぼおっと汽笛が鳴った。

「急がないと乗り遅れちゃう。じゃあね」

お姉さんは再び歩き出し、乗車券を持ったまま手を振る。

「あなたの希望は船長に伝えておくよ」

僕は棧橋の先端まで出港する観光船を追いかけて、見えなくなるまで手を振り続けた。

それからわずか数日後のことだ。

その日も朝霧の中に浮かぶ幻島を庭から眺めていた。すると、日課の釣りから帰ってきたじいちゃんが、これまた日課のように、無言で僕の頭をガシガシと乱暴に撫でた。

「くっせ。じいちゃん、魚くさい手で触るなって言ってるんだろ」

「いいから座れ」

じいちゃんは先に縁側に腰掛けて、隣の板敷きを手でべたべたと叩いた。

そして僕が座るやいなや、細長い紙切れを差し出した。観光船の乗船券だ。

「じいちゃん、どうしたのこれ？」

「今朝、郵便受けに届いていた。おまえの名前が入っている。今停泊している便の乗船券だ」

「じいちゃんが買ってくれたの？」

「いいや。郵便受けにあったと言っただろう。この乗船券は買えるものじゃないんだ」

半ば強引に乗船券を握らされた。

「すごいや。早く行こうよ。じいちゃん、急いで！」

僕が乗船券を手に立ち上がったも、じいちゃんは動かなかった。

「乗れるのはケン坊だけだ」

港まで見送りに来てくれたじいちゃんの姿はすぐに霧に隠れて見えなくなった。観光船から見る島は、霧の中にぼんやり浮かぶ影でしかない。

辺りが真っ白になって景色が見えなくなったところ、音の割れたアナウンスが入った。

『ご乗船、おめでとうございます。当観光船は幻島を出港いたしました』

「幻島を出港だって？」

思わずスピーカーに向かって問いかけた。

これではまるで、今まで暮らしてきた島の方が幻みたいじゃないか。朝霧の向こうに見えていた島こそが幻島のはずだ。

誰かに尋ねようにも、客席に人の姿はない。しかたなく僕はアナウンスに耳を澄ませた。

『幻島は上陸すると島を出られませんが、特別にお帰りが叶った方に乗船券を渡ししています』  
そこでようやく僕は片道乗船券しか持っていないことに気がついた。これでは元の島に帰れない。

甲板に出て船尾の方向を眺めるが、辺りは真っ白で島どころか海面すら見えない。

「じいちゃん！」

声の限り叫んでみても、じいちゃんに届くはずもない。

やがて観光船は、霧に包まれた島に接岸した。繰り返し下船を促すアナウンスに追いつかれるようにして、僕は今朝まで幻島だと思っていた島に上陸した。

ひと気のない待合室に、白いワンピースの女の人がぼつんと立っていた。僕を見つけると小さく手を振った。先日のお姉さんだった。

「乗れてよかったね」

「僕が観光船に乗れるようにお姉さんが頼んでくれたの？」

「そう約束したでしょ？ もしかして、信じてなかった？」

たしかに船長に伝えておくとは言っていたけど、その場限りの挨拶みたいなものだと思っていた。

「それで僕のことを待っていてくれたの？」

「うん。気になったからね。あの島の人たちはみんな姿が透けているのに、あなたはしっかり見えていたから。帰れる人なんじゃないかと思ったの。帰り方がわからないだけで」

「透けているって、幽霊じゃあるまいし……」

言い掛けて、頭の中でぱっと光が弾けた。

そうだ。僕のじいちゃんは、僕が生まれる前に亡くなっている。嵐の夜だったという。漁師だったじいちゃんは漁船の様子を見に行つて、高波に飲まれたって聞いた。

お姉さんは困ったような顔をして、それから寂しそうに笑った。

「あの島に、畑をやってるおじさんがいたでしょ？」

僕は頷いた。

「あれ、わたしのお父さん。すごく忙しい会社に勤めていてね、営業車を走らせていて居眠り運転をしちゃったみたい。海の近くの橋から車ごと落ちて……」

僕はなにも言えなくて、おなかの辺りの服をキューツと握りしめた。

お姉さんはもう僕の方を見ていなくて、海を——あの島がある方を見つめていた。顔は見えないけれど、泣いている気がした。

「幻島は海で亡くなった人が行くところなんだって。上陸したら帰れない。でも時々帰れる人がいる。わたしとかね」

振り向いたお姉さんは微笑んでいた。

「ただ、あなたみたいに長い間島で暮らしたあとに帰れる人は珍しいと思うよ」

そして、さよならも言わずに行ってしまった。

観光船はいつの間にかいなくなっていた。

どこへ向かえばいいのかもわからずに海岸沿いを歩いていると、海からの風鳴りが、なんだケン坊、と聞こえた。魚くさい風が僕の頭を乱暴に撫で、通り過ぎていく。

やがて風向きが変わった。島の奥から吹いてくる。

おーい、おーい、と風が鳴る。僕を呼ぶ。

僕は、声のする方へ歩き出した。